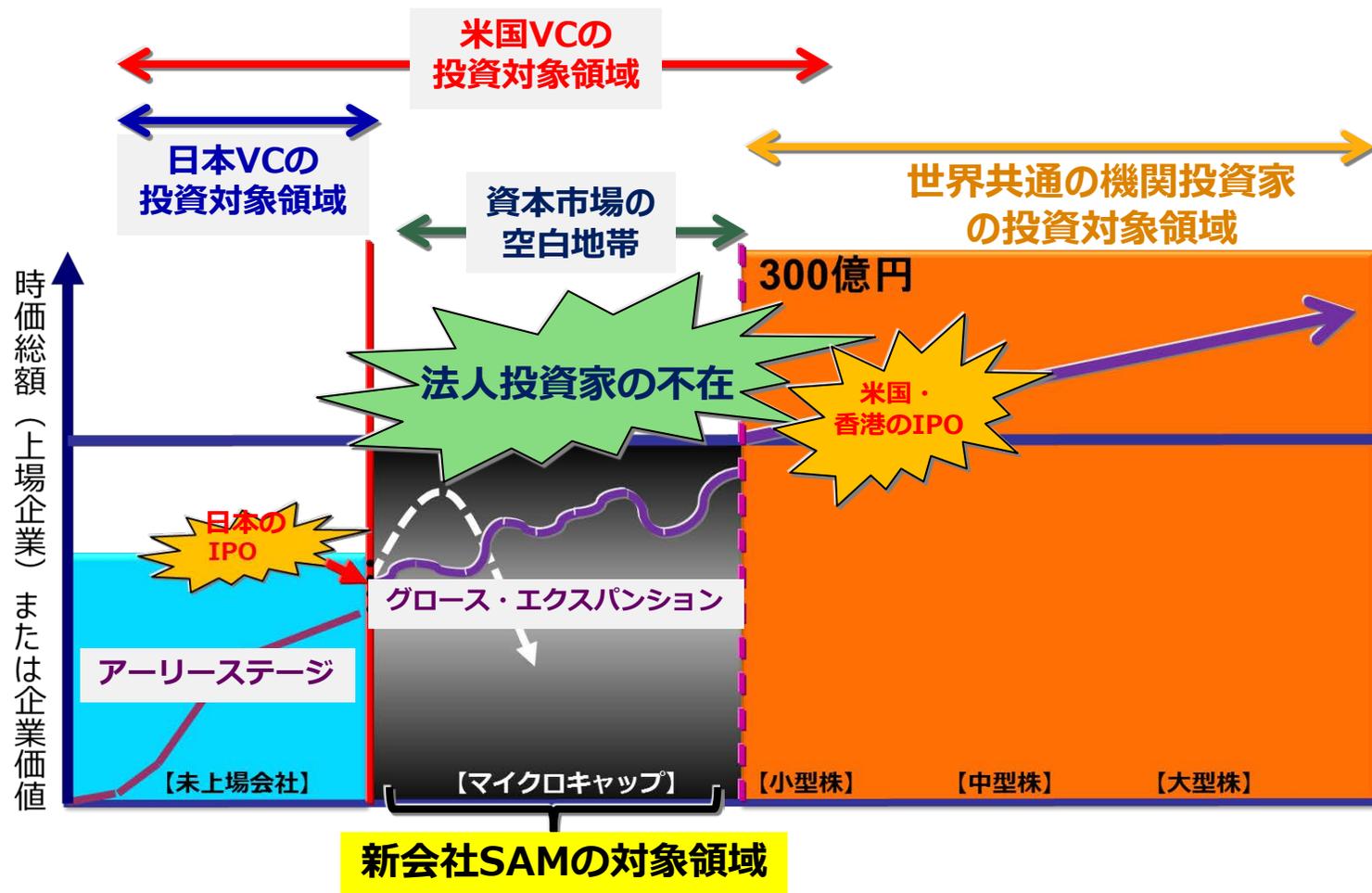


マイクロキャップ公開会社対象の新会社SAMの設立の目的

SAM

日本は、IPOの審査基準を緩和したことから、機関投資家の投資下限である時価総額300億円以下のマイクロキャップ企業が上場会社の半分を占める構造となっております。このため、ベンチャー企業が株式を公開しても、個人投資家頼みの株式取引となり、出来高や時価総額が伸び悩み、増資による直接金融が困難な状況となっております。



【マイクロキャップのジレンマ】

- ①日本のIPOでは機関投資家不在のため successful IPOが少ない。
- ②VCのロックアップ期間後にも、EXITが出来ず株式流動性が低く抑えられる。
- ③浮動株、株主数が伸び悩み、株価 (PER)が過小評価される。

資本市場の空白地帯を埋め、上場後のマイクロキャップの健全な成長を支援する企業として、SIP-FGは新会社SAMを設立。

ストラテジック・アセット・
マネジメント株式会社 (SAM)
代表取締役社長 関口裕一

株式公開後のマイクロキャップ企業に対する資金調達の支援及び、マイクロキャップを対象とした株式の投資アドバイザー業務。

エス・アイ・ピー株式会社
(SIP)
代表取締役社長 齋藤茂樹

公開・未公開のベンチャー企業に対するハンズオンのコミットメントを前提としたコンサルティング業務及び、ベンチャーキャピタル事業。

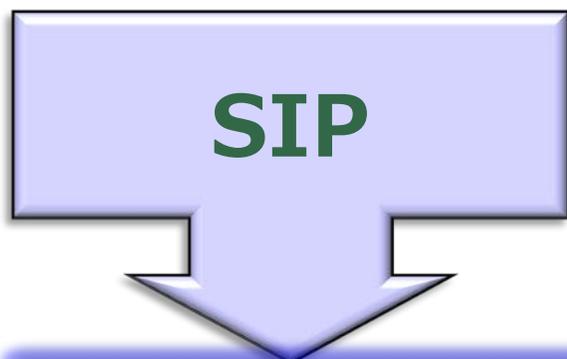
資本政策支援⇒企業への株式市場評価の改善

- ◆ 資本政策策定・実施支援
(株式流動性対策・安定株主対策・資本増強対策)
- ◆ 資本政策をバックアップする投資ファンドのアレンジ
- ◆ IRコンサルティング

次期成長戦略の策定・実施支援⇒企業収益の改善

- 事業拡大のための、ビジネスモデル開発支援
- ◆ 事業構造改革支援
 - ◆ 海外を含む事業展開・提携支援

SIPがハンズオン型VCとして培った「予想困難なビジネス環境のなかでのビジネスモデルのイノベーション・発展能力を評価」する視点から、マイクロキャップ企業のエクспанション戦略をデューデリジェンスすることで、「成長の本質」を捉えた支援を実施します。一方、SAMは、「ベンチャービジネス側の資本政策のロジック」と「投資家からの投資ロジック」双方の視点から、エクспанション・ステージに適した財務戦略展開と効果的なIRを支援します。

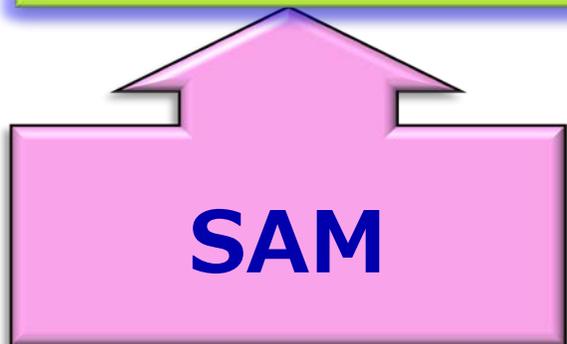


ハンズオンVCとしての企業の中期計画のデューデリジェンス

- ① 企業を取り巻く環境の把握・認識
- ② その企業に相応しい事業展開パターンの評価
- ③ 競争優位性を持続させる利益永続因子の評価

ビジネスモデルのイノベーション展開力の評価

IPO後のエクспанションとしての総合的なノウハウの提供

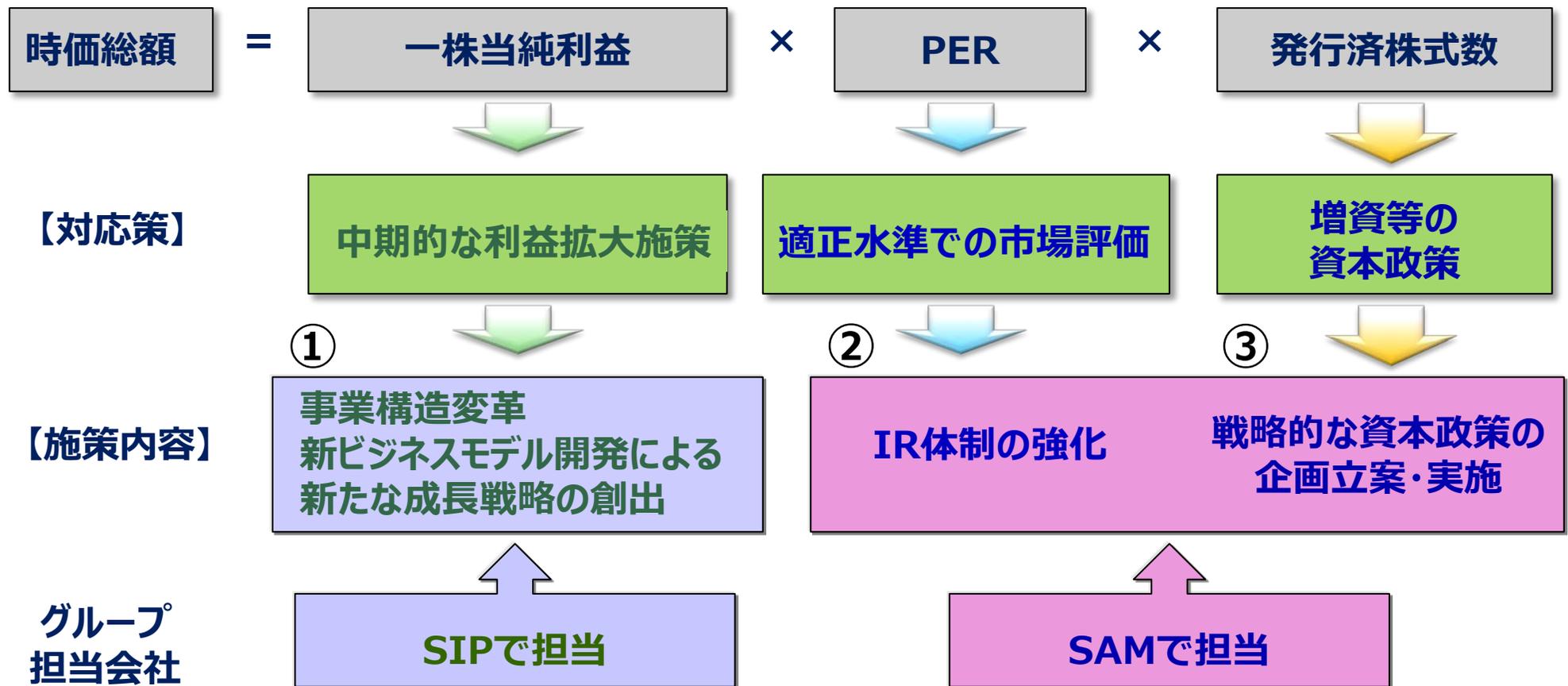


IPO後の資本政策と資金調達に関する経験・ノウハウ

- ① ベンチャー企業の資本政策に関する知見
- ② 金融機関・投資家からの視点

IR体制の強化と株主づくりに関する経験・ノウハウ

SIP-SAMは、資本市場の空白地帯に陥っている成長潜在力の高い企業に対し、SIPが、①「事業構造の展開による成長戦略をハンズオン支援」を実施し、その潜在成長力を顕在化させるとともに、SAMが、②「投資家からの評価」を高め、③「適切な資本政策を実現する」ことにより、東証I部上場企業を狙える時価総額300億円超の企業に発展することを支援いたします。



資本政策の構造は以下に示す通り、その根幹を成すものは資本増強対策に基づく証券市場からの資金調達であり、これを如何に円滑に且つ継続的に進められるかが要諦となります。一方、企業の安定的な運営のためには、トレードオフの関係にある安定株主対策と株式流動性対策を併せ進める必要があります。

【資本政策の構造】

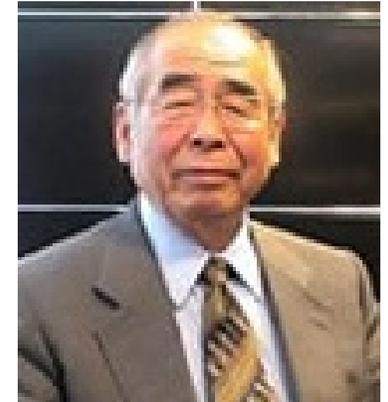


SAMは、マイクロキャップ企業の特徴を考慮にいた、安定的な資本増強対策を支援します。

齋藤は、JAFCO、日本アジア投資、CSKベンチャーキャピタルなど、日本の創世記のベンチャーキャピタルの創業経営者。有責組合法の法制化以前に、一般法をベースにした日本で最初のファンドの仕組みを考案、組成した実績を持ち、日本のベンチャーキャピタル業界で指導的役割を果たしてきたパイオニアであり、SIPの創業者です。SAMの経営においては、取締役会長として、長年の先駆的な経験に基づいた助言を行います。

齋藤 篤 (サイトウ アツシ) 取締役会長

北海道大学法学部法律学科卒。野村證券(株)投資信託部長等を経て、現(株)ジャフコ常務取締役として民法の組合による投資事業組合の制度を開発し、日本初のベンチャーキャピタルファンドであるジャフコ1号を創設。続いて、日本アジア投資(株)を立ち上げ日本企業とアジア各国の企業との合弁会社を現地の証券市場に公開を目指すスキームを発展させる。さらに、CSKの故大川創業者に乞われ、IT専門のベンチャーキャピタル会社であるCSKベンチャーキャピタル(株)を立ち上げた日本のベンチャーキャピタル業界創設者の一人。法政大学大学院、金沢工業大学院にて、ベンチャービジネス及びベンチャーキャピタルの教鞭もとってきた。



1996年ベンチャー・キャピタル会社、エス・アイ・ピー(株)を創業。
現在同社ファウンダー名誉顧問。

◆著書

「JAFCO 15年の歩み」日本合同ファイナンス社史 編纂
「産業としてのベンチャーキャピタル」(白桃書房)

関口は、インベストメントバンク業界での東京・ロンドン・香港でのファンド・マネジメント及びM&A担当の経験と、日本ドレーク・ビーム・モリン、ぴあ、ジュピター・テレコム等上場事業会社での財務・資本戦略・IR責任者の経験とを持ち、投資家サイドと事業会社のCFOおよびIR責任者の、両方の経験をもっています。SAMの代表者として、アドバイザーサービスとファンド連携を統括致します。

関口 裕一（セキグチ ユウイチ）代表取締役社長

1985年東京大学経済学部卒業後、日本債券信用銀行（現あおぞら銀行）入行。東京・ロンドンにてM&A・資金証券・デリバティブ取引を担当。1995年より香港にてアジア全域を対象としたエクイティ・債券投資・為替の複合ファンドマネジメントを統括。ファンディングコスト控除後の年平均利回り10%を維持。日本債券信用銀行の国有化期間は海外の銀行保有資産売却をグローバル投資家に対して実行。

2000年以降、事業会社のCFO・IR部門に軸足を移し、(株)日本ドレーク・ビーム・モリン（JASDAQ上場時）（現テンプスタッフキャリアコンサルティング(株)）財務部長、ぴあ(株)株式公開時の執行役員戦略企画本部長・事業開発本部長、(株)ジュピター・テレコム コーポレートコミュニケーション本部副本部長兼IR部長、その他(株)グルメぴあネットワーク専務取締役等を歴任。

バイサイド・発行会社の両方の立場の責任者として豊富な経験を持つ。
SAM設立に伴い、統括責任者に就任予定。



齋藤は、日米の情報通信大手企業での経験、ベンチャー企業でのIPOおよびIPO企業のインキュベーション、ハイテク業界でのマネージメント経験を活かし、投資先候補の技術・ビジネスモデル・事業戦略を評価、投資後は高付加価値化のための事業戦略・資本政策戦略などについて、投資先企業の成長のためにさまざまな角度からのハンズオン支援を実践します。

齋藤茂樹 (サイトウ シゲキ)

ストラテジック・アセット・マネジメント株式会社 監査役

1961年生まれ。東京大学経済学部卒業後、85年に民営化一期生としてNTTに入社。大企業向け通信ネットワークの販売・構築、料金・サービス契約約款のデザイン、認可業務等を担当、94年退社。97年、米国マサチューセッツ工科大学（MIT）スローンスクールにてハイテクベンチャーの経営を学び、MBA取得。その後、米国ネットスケープ・コミュニケーションズ入社、日本市場でのポータル・ビジネスを統括。（株）デジタルガレージでは、公開期の中心メンバーとして参画、代表取締役として大手企業への戦略的インターネット・ソリューションを提供。大企業とともに新規事業を立ち上げる手法「スポンサード・インキュベーション」を開発。2004年～2011年までデジタルハリウッド大学大学院教授としてデジタルコンバージェンス論及びベンチャーキャピタルビジネス論で登壇に立つ。現在は、インターネットをはじめ幅広い領域で活動中。

日本ベンチャーキャピタル協会理事、日本ベンチャー学界会員



◆著書

「イノベーション・エコシステムと新成長戦略」（丸善出版）

「デジタル・コンバージェンスの衝撃～通信と放送の融合で何が変わるのか」日経BP企画